

# 「平成30年度 第5回大月みらい協議会」 会 議 概 要

日 時 平成31年1月17日（木）午後7時から午後9時まで  
場 所 大月短期大学 会議室  
出席者 委員12名（9名欠席）  
小笠原則雄、長田弘、小俣理美、三富聖久、三枝良光、佐藤茂幸、志村淳、  
庄司有紀、白川太、三木範之、武者稚枝子、山口明秀  
【事務局】 兼子総務部長、金畑地域活性化担当リーダー、堀内

## 1. 志村議長あいさつ

こんばんは。年がかわりました。昨年中は大変お世話になりました。これから3月までの間には、非常に重要な課題がありますので、是非よろしくお願い致します。

今日は各グループのチャレンジ事業の最終報告書を発表して頂きます。皆さんには、今までは自分達のグループにのみ視点を置いて頂いていましたが、今日からは、全員が、全てのグループのことを共有して頂きたいと思います。大事な場面になると思います。特にふるさと教育についての提案や方向性については、かなりの準備が必要になると思います。それについてもよろしくお願ひしたいと思ひます。

今日までの間に、佐藤副議長と事務局で、その都度このみらい協議会をどのように進めていこうかと作戦を練って参りました。しかしながら、これから先は作戦を練っても、フリーハンドの状態での会を進めていかなければならない状況もあると思ひますので、是非よろしくお願ひ申し上げて、簡単ではございますが挨拶に代えさせていただきます。

## 2. 議 題

### (1) 平成30年度第4回会議概要について

- 平成30年度第4回会議概要の市ホームページへの公開について承認されました。

### (2) 大月市まち・ひと・しごと創生総合戦略 進捗状況報告書及び内部評価書に係る意見について

- 総合戦略に係る大月みらい協議会からの意見（案）が示され、了承されました。

### (3) 大月みらい協議会チャレンジ事業の最終報告について

#### 【志村議長】

次に、議題の3に移ります。ここからは佐藤副議長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願い致します。

#### 【佐藤副議長】

皆さんこんばんは。ただ今議長からお話がありましたが、議題の3番目について、私の方で進行を務めさせていただきます。大月みらい協議会の最終報告についてです。ここで時間を割いて、皆さんと議論していきたいと思います。

まず、今、どこにいるのかを確認してから議論を進めていきたいと思います。今日は第5回大月みらい協議会で、この後時間を割いて、各グループからの最終報告をして頂きます。その報告後、みらい協議会全体で各チャレンジ事業の最終的な情報共有を行います。そして、年度末までに2月初旬と3月に、今日の会議と併せて、計3回の会議を予定しており、それに加えて、2月に成果発表会を開催する予定でいます。成果発表会は、市長や市民の方に、こんなことをやったという報告をする場として予定しています。成果発表会は、この2年間の成果をまとめて出すということが、我々の最後の仕事になってきます。その部分を踏まえた上で議論をしていきたいと思いますので、よろしくご承知置き下さい。

大月みらい協議会として、何を「ふるさと教育」について提案するのか、あるいは提言するのか、企画書を出すのか、まだ定かではありませんが、何らかのアウトプット（成果）を示すというまとめの作業があるということをご承知置き頂ければと思います。

それでは最初に、チャレンジ事業の最終報告について、各グループから発表して頂きたいと思います。なお、これまで途中経過の中で何度か事業の内容については説明をして頂いておりますので、時間も限られていることから、今日は特に「事業の評価」や「今後の課題・対応案」をメインにご説明頂ければと思います。

それでは、Aグループから順番に報告をお願い致します。

#### < Aグループ >

#### 【白川委員】

Aグループの報告を致します。私の方で概略を説明させていただきます。取り組み内容等は既にこれまでに発表させて頂いておりますので割愛し、ふるさと教育の貢献について説明致します。Aグループについては、当初計画したものは概ね終了致しましたので、成果的なものを発表していきたいと思います。

まず、「理念1. 子どもの前で夢を語る大人を作る」については、Aグループのチャレンジ事業として、「みらい夢カード」、「職業講話」、「職場体験」というものを、大月東中学校で実施致しました。その結果としまして、子どもや大人が夢をテーマに語り、意識され、予想以上の盛り上がりが見られました。先生方や保護者の方々から、我々のグループで想像していた以上のコメントを頂き、大きな広がりを感じたところであります。そのような

意味では、「子供の前で夢を語る大人を作る」という理念に大いに貢献が出来たと思っています。子ども達は、職場体験で自分が行く予定の事業所だけでなく、幅広い大月市内の事業所の話を見聞きすることで、今まで知らなかった新しい大月市というものを見ることが出来たのではないかと考えています。そして、仕事に対する心構えとか、将来についての展望、大月市できらきら働いている人がいるんだという事が子ども達の目に映ったということや、自分が将来大月市で働いている未来像のようなものを描けたのではないかと考えています。

職業講話を聞いていた先生方からも、「私たちも聞いていてとても面白かった。」との声を頂き、先生方にとっても大月市の事業所を知る良い機会になったというコメントを頂きました。

「理念2. 子どもの前で夢を応援する大月コミュニティをつくる」については、この事業を通して、事業所の方々から、子ども達を担当した社員の方の成長が見られたことや、職場体験中に生徒との夢を語る時間を設けたことで、社員の方に「子どもが抱く夢を応援する」という意識が出て来たことや、会社の中でそういう会話が生まれてきたことが成果を感じたところであります。

また、Aグループの取り組みは、最初はコミュニティを目的に実施したのではなかったのですが、結果的に、大きな予算をかけずに子どもから大人まで、学校や民間事業所を巻き込んだの前向きな話しで盛り上がり生まれたことから、事業的に考えますと、結果は、大月みらい協議会の設置目的である「地域の活性化」に寄与し、今後、行政側が求めている市民活動による大月市の活性化に結びつくような取り組みに発展するのではないかと期待が持てるものだと思っています。

次に、「チャレンジ事業の評価」についてです。「みらい夢カード」を大月東中学校の廊下に貼りだした瞬間に生徒達の人だかりとなり、内容を読んだ直後から「俺、この会社へ職場体験に行くんだ！」などの積極的な反応が見られました。また、様々な業種についても様子を知ることが出来て、仕事の内容について深く考えるきっかけとなったと聞いています。

「職業講話」では、各事業所の「実情」、「夢」、「仕事に対する姿勢」が伝えられました。その中で、講話者に対して複数の生徒の保護者から、「講話が良かった」という話がありました。これは、保護者が職業講話を直接聞いたのではなくて、子ども達が家に持ち帰って、こういう事業所がこういう発表をしたんだよという家庭内での会話が生まれていたということです。このことから、家庭も巻き込んだ成果が出たのではないかと考えます。

また、仕事の難しさや地道に努力する姿勢に感銘を受ける生徒や、「この会社の情熱がすごい！」と目を輝かせる生徒がいたことにも大変うれしいこととございまして、特に、女子の中に製造業（＝技術職）について興味を持つ生徒がたくさん見られたことで、今までこのような会話はなかったということから、ある部分で刺激があり、効果があったのではないかと感じています。生徒達は生き生きとした表情で職場体験から帰ってきたようで、

自分の将来について深く考えられた子が多く、自分の夢と事業所を結び付けていた生徒もいたということが先生方からのコメントとしてありました。

この事業全体を通しますと、自分達が想像した以上に成功したのではないかと考えています。これは、「みらい夢カード」というものを貼り出して、「職業講話」を行って、「職場体験」を行った、3つの流れから偶発的にこのような結果が生まれました。また、「夢」というテーマが難しくなく誰でも語れるというところが、生徒、先生、事業所の皆が夢を語れたというところが盛り上がりの要因だと思っております。「大月の事業所がすごい！」という子ども達の話や、生徒だけでなく先生も大月を知る良い機会となり、今後も多くの事業所に参加して頂き、来年度以降も事業を継続して欲しいというコメントを頂いております。

課題の部分ですが、「今後も事業を継続してほしい」という意見はたくさん寄せられています。また、事業自体は効果が広くて大きく、大月市の中でも貢献できるものであると我々は考えてみました。さらに、これを低予算で実施できるものと思っておりますので、何とかしてこれを継続したいというのがAグループの最終的な想いです。

課題の1つ目は、学校と事業所間のパイプ役となる事務局（組織）が必要になると考えています。事業所は事業所側でまとめることは出来ます。学校は学校側で、教育委員会を通じてまとめることが出来ますが、その橋渡しをする役目がどうしても必要ではないかと思いました。これがなくして今回の事業は成功しなかったと思っています。事務局は今後の課題の1つです。

また、事業を継続する場合の今後の展開案としまして、展開1は、賛同する事業所を拡大していく必要性があります。展開2としましては、今回猿橋中学校は実施出来ませんでした。先生方からの要望は聞いておりますので、猿橋中学校でも出来れば実施してみたいと考えています。ただ、猿橋中学校は6月頃実施ということなので、4月の年度初めを待たずに動かなければいけないということが課題でもあります。展開3では、市民への情報発信として、先生や保護者の方からもっと多くの保護者の方にも職業講話に参加して頂きたいという声が多く挙がっておりますので、このような部分を今後の展開に取り入れていきたいと考えています。展開4としては、「みらい夢カード」の拡大です。職場体験が可能な事業所だけではなくて、多くの大月市内の事業所、例えば食堂であったり、サービス業であったり、八百屋さんであってもいいと思います。生徒を受け入れられなくても、夢を持って、こんな事業の理念を持って仕事をしているという「みらい夢カード」というものを大月中の事業所が、学校の廊下に貼れることが出来ればということが、私達の考えた今後の展開の1つです。Aグループの発表は以上です。

## < Bグループ >

### 【佐藤副議長】

Bグループについては途中で計画は終了ということになり内容的には以前に報告した形

となっています。ただ、事業の評価は行っているようですので、私が発表させていただきます。

事業の課題及びその対応案について、1/2成人式と夢塾の連動が出来なかったことについては、あまりにも大月市の教育現場を熟知していないままの提案であったことであり、今後、提案や立案をする場合、それぞれの現場スタッフ、今回の場合は教育関係者であります。その方々と一緒に席に着き、協議し、立案することが実りある提案になるのではないかと。ただし、1/2成人式において子供が抱いた夢を「いかに叶えるのか」ということについて、教育現場の体制が無いことはあまりにも「もったいない」ことであり、この子供が抱いた夢を大月の宝として、拾い上げ、実現を手助けし、子供を未来に導くような教育現場による取組み、体制づくりに期待します。以上がコメントとしてありました。

「夢塾」については、我々みらい協議会の中でも、発想や企画としては良いが、現実レベルにするには、まだまだやるべきことがあって、チャレンジ事業の中身としては実施できなかったということではありますが、企画としては1つの成果として、みらい協議会に盛り込んで良いのではないかと思います。

#### <Cグループ>

##### 【志村議長】

Cグループでは、前回の会議での途中経過報告の後、1月10日に学童クラブ「たんぼぼ」で取組みを行いました。この報告をしてから最終報告を致します。

1月10日に総勢25名で、地域の方5名のご協力を頂きながら実施しました。子ども達と我々スタッフの数が同数であったことから、手をつないで、2時間半ほどのコースを、バードウォッチングをしながら歩きました。子ども達は大変喜んでおりました。取組みの説明は以上でございます。

本題に入りたいと思います。私達は学童クラブにポイントを置いて活動をして参りました。なぜ学童クラブの活動に着目したかと言うと、現在の大人は子供の頃を振り返り、学校だけではなく地域の支えの中で、自由な時間や遊びを通じて成長してきたが、昨今は少子化の折、子供たちの集う機会が地域に乏しいのが現状である。そこで、一つ目として、「学童クラブが学校教育の場ではないこと」、二つ目として、「学童クラブが地域の方との関わりを創り出せる場」と考え、学童クラブを拠点とする事業としました。

これまでに猿橋地区の学童クラブ「ひまわりⅠ」や「ひまわりⅡ」、鳥沢地区の学童クラブ「たんぼぼ」を対象に、4回にわたって事業を展開して参りました。事業の検証ということで、まず、「ふるさと教育への貢献」については、一つ目として、市内のフィールドを散策することで、夢につながるスポットを多数発見できたと思います。二つ目は、子供と大人の夢に対する気づきにつながったのではないかと。三つ目は、地域の方が参画したことは、子供と地域の方などの連携が深まり、夢をまく土壌づくりとなったと思うということでした。

次に、チャレンジ事業の評価ですが、まず「子どもの前で夢を語る大人をつくる」については、子どもの夢につながる種まきは、夢を語る大人づくりにつながっていく可能性を感じました。次に、「子どもが抱く夢を応援する大月コミュニティをつくる」については、地域の方の参画を得る中で、事業を行ったことは、大月コミュニティづくりの小さな一歩につながったと思いました。4つの事業を行う中で、このような感想をまとめさせていただきました。

次に、事業の課題及びその対応案についてです。事業を継続させるための課題としましては、その前提として、この事業を継続して行わないという選択肢は全くありません。事業を継続する理由としまして、3つ程挙げさせていただきます。

1つ目の理由としては、1回2回と行った事業が好評を得ることはある意味当然とも言え、学童の子どもたちに「今日は、みらい協議会の日だ」と覚えられて、楽しみにされるようになって、初めてふるさとの楽しい思い出の1ページを作ることに貢献したと言えるという意見があります。非常に冷静で客観的な意見で、続けていくことは大事なことであるということです。

2つ目の理由として、4つの事業をした中で、子ども達や先生、応援して頂いていた地域の方々が、どのような反応を示したかを述べておきたいと思います。ある学童クラブの子ども達は、事業が終わってお別れした後、私達はその場所から去るまでの間に、幾度となく子ども達が追いかけてきて、何度も「ありがとう。」という言葉をかけて頭を下げてくださいました。私達も帰るのですが、うしろ髪を引かれるくらい感激を致しました。また、協力してくれた地域の全ての皆さんが喜んでくれて、地域の方や先生が好感を持って受け入れてくれました。さらに、「次にこのようなことはやって頂けないですか？」というオファーがありました。断ることはとてもできません。精一杯の努力はさせていただきました。さらに、1月10日の学童クラブ「たんぼぼ」の取り組みにおいて、猿橋の学童クラブの先生方が、鳥沢の学童クラブの先生に、「今度は何をやるのですか？見せて頂けませんか？一緒に私達も参加させて頂けませんか？」という問合せがあり、猿橋の学童クラブの先生も一緒に同行致しました。このようなことから、学童クラブを対象としたこの取り組みについては、学童の先生方に期待感を持たせることが出来て、何かの気づきにつながった一歩ということで評価しても良いのではとないかと思いました。

3つ目の理由として、私達はこの取り組みを、夢を抱く子ども達に種をまいたと捉えております。種をまいておいて、芽が出ない内にお終いなのかということがあったら、夢を語る大人をつくるという理念はどうなるのかということになります。総崩れになってしまうと考えました。何らかの形で事業を進めていくことが大事なんだという部分が継続の理由です。

最後に、継続のための課題を申し上げます。チャレンジ事業を踏まえ、当該事業を継続させるための課題として、①地域の方の協力者を見つけること、②学童クラブと地域をつなぐパイプ役の設置、③市民（地域の方）への情報発信、④行政のタイアップ、⑤その他、

潜在的な課題の把握、コーディネーターの育成、団体の立ち上げ及び予算の工面が挙げられます。特に④の行政とのタイアップについて、私達のグループでは、自主グループとして活動してきた経験者がいます。その方から貴重な意見がありました。「自主グループでやると長続きしません。必ず壁に突き当たります。行政とのタイアップは大事です。」という内容です。これは、先程のAグループの委員の方の話と全く一緒だと思いました。

そして、課題に対する対応策を申し上げます。①の課題については、大月みらい協議会のメンバーの人脈やさまざまな団体と連携するなどして模索していく。また、市の人材バンクを活用する。②の課題については、当面は企画財政課が事務局を担う。③の課題については、事務局によりさまざま媒体を利用して事業の認知度を高める。このことにより、事業の協力者が現れて、自走していく流れが見える。④の課題については、所管課の協力を以って事業を遂行することがスムーズな事業展開につながる。⑤の課題については、今後、事業を継続していくことで対応策を模索していきたいと考えております。以上で説明を終わります。

#### <Dグループ>

##### 【佐藤副議長】

Dグループは私の方から報告をさせていただきます。Dグループの事業は「夢を叶える大月仕事人」というものです。市の広報誌を活用して、5回に亘って仕事人を紹介していく情報発信のチャレンジ事業です。事業の概要や目的等は既にご承知の部分でありますので割愛させていただきます。

今回の事業では、5人の仕事人を紹介させていただきました。この5人の大月仕事人に先導して頂いて、出来るかどうか分かりませんが、2020年度までに「夢を叶える大月仕事人・100人」を発掘し、多角的に情報発信している状況を作り上げるという長期的なゴールも設定しています。そのための課題も後程報告させていただきます。

実施メンバーについては、みらい協議会の委員の他に、事務局として企画財政課と秘書広報課がかなりバックアップして頂きました。広報誌の掲載枠だけでなく、取材等々でご協力を頂きました。今回、取材を行う若者取材班を編成しました。大月短期大学の学生6名と都留高校の学生2名で取材を行いました。波及的な効果としましては、この取り組みについて、NHKの甲府放送局の取材があり、実際にテレビで放送されたという効果もありました。事業は、平成30年10月号から平成31年2月号の広報掲載を持って事業が終了するスケジュールとなっています。

事業の検証と評価について説明致します。まず、「ふるさと教育の理念」に対する評価です。①「子どもの前で夢を語る大人をつくる」という理念については、当理念に直結する事業であり、「夢を語る“大人”」の市内広報という意味で評価できるとさせていただきました。②「子どもが抱く夢を応援する大月コミュニティをつくる」という理念については、子供の夢を応援するまでの相互交流までには至っていませんでした。ただし、若者取材班が、

チーム化し、大人との協働が生じるようになれば、世代間でのコミュニティの創造につながるかもしれないという手応えのようなものは感じました。今回の取材班には、大月短大生が多く登場していますが、大月短大生は市外や県外出身者が多く、地域への密着度が低いのですが、都留高校の生徒は地元出身が多いので、その反響も含めて継続性があるのかなと思いました。中学生まで広げることが出来れば、もっと継続性が出て来ると思いますが、中学生の取材には同時に多くの課題が出て来ます。

次に、事業目的達成度に対する評価についてですが、この事業を計画するに当たって、いくつか目標を設定しました。その目的に対しての達成度についてです。①ふるさと教育の理念にある「夢を語る大人」として、上記要件にある「夢を叶える大月仕事人」を先導的に5名発掘することについては、5名の仕事人を発掘し情報発信が出来ました。男女のバランス、地域的な網羅性もある程度カバーすることが出来ました。②これら大月仕事人に大月市広報を通じて夢を語ってもらい、子供や若者を触発し未来を展望する想像性とモチベーションを養ってもらうことについては、取材した若者には刺激的な経験であったと思われます。しかし、「多くの子供達を触発できた」までには至っていませんでした。おおつき広報誌の想定読者は、大人の市民であり、この点では媒体としての限界があります。今後は今回掲載記事の二次的利用も含めて、小学校・中学校を中心とする各教育機関の関係媒体による発信を検討することが課題として挙げられます。③大月の大人たちに対して、次年度以降の「夢を叶える大月仕事人」になるべく啓発し、世代間の精神的な交流を深めるということについては、「大月仕事人」の原型を確立出来たことから大いに評価出来ます。今回5名の発信を足掛かりに、多くの方に「大月仕事人」になってもらえる可能性が確認出来ました。また、取材を高校生や短大生に実施してもらったことで、世代間交流の方法も検証できました。今後は、対象を小・中学生（子供達）に広めることと、継続的な交流の方法を検討する必要が課題として挙げられます。

次に、若者取材班、大月市仕事人、大月市秘書広報課広報広聴広報担当から簡単なアンケートを取りました。若者取材班に対してのアンケート項目は、「記事を読んでどのように感じましたか？」ということと、「記事が掲載されたことで反響はありましたか？」という2つの項目です。その結果、高校生からは結構反響があったようですが、短大生についてはあまりなかったようでした。ただ、取材した本人はすごく良かったと言っておりました。

大月仕事人に対してのアンケート項目は、「この企画についてのご意見とご感想」ということと、「記事が掲載されたことで、反響はありましたか？」という2つの項目です。その結果、大月仕事人からはこの企画について大きな評価を頂き、反響も大きかったようです。子どもの前で夢を語るという場面は、仕事の中でも中々ない機会でした。それ自体が刺激になったのではないかと思います。

大月市秘書広報課広報広聴広報担当からもコメントを頂きました。企画としては良い企画でしたという回答でしたが、継続性という点については、隔月にするとか、掲載枠の問題もあるというコメントを頂きました。実際に編集作業が大変だったので、この編集作業を誰

がどうやって、実施していくのかという部分も課題として挙げられました。

次に、事業の課題及びその対応案をまとめました。まず、この事業を継続させ、発展させるための課題としては、全部で6つ挙げさせて頂きました。1つ目は、「若者取材班を中学生レベルまでに編成する」必要があるということです。若者取材班として、短大生や高校生においては実証ができた。ただし、中学生については、主体的に質問する能力は未達で難しく、サポートするようなチーム体制の検討が求められます。2つ目は、「おおつき広報の掲載枠を確保する」必要があるということです。例えば隔月掲載など、実現可能な企画を再度提示する必要があります。3つ目は、「原稿の編集やまとめなどの実務を誰かが行う」という現実的な課題が挙げられます。今回は、企画財政課がその実務を担って頂きました。当事業を継続・発展させるためには、その業務を誰が担うかは明らかに出来ていません。4つ目は、「他のチャレンジ事業と連携をとる」必要があります。チャレンジ事業は親和性が高い事業ですので、紹介する仕事人をA～Cのチャレンジ事業の主体者から選ぶと連携が図れるのではないかと考えます。5つ目は、「仕事人として誰が選ぶのか、どう選ぶのか、ルール化する」必要があるということです。選出方法について再検討する必要があります。この事業が広がれば広がる程、「なぜ私は選ばれないのか?」とか、「なぜあの人は選ばれたのか?」という疑問が多く出て来ると思われれます。もう少し選定基準を整理する必要があります。ただし、基本はだれでも仕事人、たまたま今回はこの人、あなたのいつかは仕事人という形が好ましいのではないかと考えます。一番の課題は6つ目の「子供たちへのフィードバックを工夫する」ということです。おおつき広報に掲載しても、直接、子供たちへのアピールにはつながっていません。「カッコいい」大人の発掘にはつながるが、それを子供たちにどのように魅せるかの工夫が必要であると考えます。たとえば、仕事人を1年分にまとめて冊子化して配る、学校関連の広報誌やホームページやブログなどの活用が挙げられます。都留高校では学校新聞に今回の記事が取り上げられました。このようなことをもっと増やしていければ、子どもの方にも波及していくのではないかと思います。

最後に、課題解決に対しての対応策として、課題を解決させるためには、「夢を叶える大月仕事人・事務局組織」が必要になると考えます。その機能としては5つの機能が考えられます。①「大月仕事人の発掘、取材企画の機能」、②「若者取材班のコーディネート機能」、③「広報等媒体プロモーション開拓機能」、④「大月仕事人のデータベース機能」、⑤「子ども達（若者）と大月仕事人の交流機能」です。ただし、収益事業とはならないため、既存の行政組織や公的機関のなかに発足させることが条件となります。例えば大月短大のなかに、学生主体の組織を立ち上げるなどが考えられます。そうであっても、現実的には多くの調整事項があり、時間と労力を要します。Dグループの説明は以上です。

■大月市の「ふるさと教育」についての報告書及び成果発表会について

【佐藤副議長】

このチャレンジ事業を踏まえて、次のチャレンジはどうするのかということになっていくと思います。それを全体の報告書としてまとめていった方がいいだろうと考えました。それを成果発表会でお披露目した方がいいだろうというのが今のところの流れです。この内容を以って、どのように最終的にまとめていくのか、そしてまとめをした上で、来年度以降の大月みらい協議会をどうしていくのかを、今日は少し議論をした上で、次回の会議である程度の方向性を示して、次々回で報告書を完成させていきたいと考えております。

●その後、大月市の「ふるさと教育」についての報告書及び成果発表会について議論が交わされました。

(4) その他

●次回会議については、2019年2月6日（水）に開催することとなりました。